

**Japanese A: literature – Higher level – Paper 1**  
**Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1**  
**Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1**

Wednesday 10 May 2017 (afternoon)  
Mercredi 10 mai 2017 (après-midi)  
Miércoles 10 de mayo de 2017 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

**Instructions to candidates**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

**Instructions destinées aux candidats**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

**Instrucciones para los alumnos**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

次の文章と詩のうちどちらか一つを選んで文学論評を書きなさい。

## 1.

現実とは何なのだろうか？ 夢幻の中において、未里<sup>アメリイ</sup>は考えていた。未里にとっては現実  
 5 実「影」であつた。信じ得ないものであつた。周囲に満ちている他の人々にとつ  
 ては現実というものは「心霊」よりも、「夢幻」よりも、なによりもはつきりした疑  
 うべくもない実在で、あつた。沢山の人々はこの世界の現実というものをものごころ  
 10 のつく頃からはつきりと認識していた。そうして他の多くの家に、町に、県に、国に、  
 世界に満ち溢<sup>あふ</sup>れている同じように現実を認識した人々との間にある黙契<sup>もくけい</sup>を、交してい  
 た。そうしてその沢山の人々の間で国が作られて、いた。その中で町が作られ、家が  
 作られ、友達が作られ、そこに蔓草<sup>つるくさ</sup>がもつれた糸のように入り組んだ関係を生じさせ、  
 15 そこでなんと言う安心した顔で、なんと言う落<sup>おち</sup>ついた様子をして人々は生きているこ  
 とだろう。人々はこれが「現実」だと、改めて考えて見はしなかつた。誰も「これが  
 現実だ」と改めて考えてみるのが、無かつた。「現実」は人々の無意識の中に存在  
 しているに違いない「もの」で、あつた。どうかすると未里は過去の記憶の中に、現  
 20 実を探し求めて、いた。未里が過去の中に入ってゆく時、記憶の明りの中には父の顔が、  
 あつた。母の姿は暗い廊下を歩いていた。庭の青葉は硝子<sup>がらす</sup>戸を透<sup>とお</sup>して母の頬を、染め、  
 15 簞<sup>たんす</sup>笥<sup>す</sup>のきしみが鳴り友禪<sup>ゆうぜん</sup>の匂いが、した。小さな普烈<sup>フリッシュ</sup>は白い衾<sup>ふすま</sup>の中に檸檬<sup>レモン</sup>色の顔  
 を見せ、どこか重い春の空は樹々の間に青く透<sup>すとお</sup>り、花々は咲き匂<sup>にお</sup>つて、いた。影のよ  
 うに蹲<sup>うづく</sup>まる父の姿が浮んでいる時、白い手が点<sup>とも</sup>す蚊遣<sup>かや</sup>りの煙は記憶の中で強い匂い  
 を立て、闇に浮んだ提灯はオレンジ色の光を放ち、過去の風に、揺れうごいた。漂う  
 未里の視野をふと塞<sup>ふさ</sup>ぐ巴里<sup>パリ</sup>の闇の、黒い緻密<sup>ちみつ</sup>な層の中にある光の塊り、それは何度か  
 20 未里が憩<sup>やす</sup>んだことのある珈琲店<sup>カフェ</sup>で、あつた。ラック・レマン<sup>ラック・レマン</sup>の黄昏<sup>黄昏</sup>の光。アマルファイ<sup>アマルファイ</sup>  
 の海の青。檸檬<sup>レモン</sup>の輝き。マドリッドの金色の昼、黒い影。それらは記憶の中で押し合  
 い、現実そのものの光や匂いを未里の記憶の中に、発散<sup>はつかん</sup>していた。それが確かに現実  
 であつたとこの世の知識が未里に、教えていた。だが死んだ人の微笑<sup>ほほえみ</sup>が、手袋<sup>てぶくろ</sup>を距<sup>はな</sup>  
 25 て未里の掌<sup>てのひら</sup>に合わさつた温かな掌<sup>て</sup>が、時刻<sup>とき</sup>の翼に乗<sup>のり</sup>つて遠<sup>とほ</sup>き、長い月日の後<sup>うしろ</sup>に  
 行<sup>い</sup>つた時未里は、思った。あれは本当にあつた事なのだろうか？ と。

過去も「影」にすぎなかつた!! 現在が「影」であるなら過去はいよいよ「影」で、あつ  
 30 た。未来もいくらかの間続<sup>つづ</sup>く「影」の連続<sup>つづ</sup>きでしか、ない。水の面<sup>おもて</sup>が曇<sup>くも</sup>つた空の色を  
 映<sup>うつ</sup>して波立<sup>なみだ</sup>ち、ゆつくりと動<sup>うご</sup>いている時未里はある橋の上を、歩<sup>あ</sup>いていた。幾度か数  
 知<sup>し</sup>れず歩<sup>あ</sup>いたことのある、橋なのだ。向う岸の紅い建物<sup>たけ</sup>は白い窓縁<sup>まどすじ</sup>とうす緑の欄干<sup>らんかん</sup>と  
 を浮<sup>う</sup>び上<sup>あ</sup>らせて空の中に立ち、暗緑色の水の上にその影を、映<sup>うつ</sup>していた。何十年かの

35 月と日との後<sup>うしろ</sup>で未里の父の眼に映ったことのあるこの建物はその時刻<sup>とき</sup>、未里の眼に  
 映っていた。無限の空の下<sup>した</sup>の紅い建物、煙の色をした辺りの家々、その橋に平行して  
 遥か向うに浮ぶ橋、光る水、うごめく人々、電車の地響き、それらのものの上に長い  
 時間の、空間の不思議なヴェールが白く立て罩<sup>かこ</sup>め、ぼんやりとした空漠が未里の胸の  
 40 中に、満ちた。父の見たものは「幻」でなくてそれは何だったのだろう。未里の見た  
 ものも「影」でなくてそれは、何だったのだろう。未里は立止った。そうしてその紅  
 い建物を、視た。紅い建物それ自身が上に映ったその影のように揺れ動き、果敢ない  
 影となつてゆくように未里には、思われる。紅い建物と川の上にゆれ動くその影とは、  
 「現実」と「影」という二つのもののように、そうして「夢」と「現<sup>ま</sup>」という二つの  
 40 もののように不思議な対照をしながら未里の眼の前に揺れ動いて、いるのだった。未  
 里は不思議な想いに満たされ、そうして又、歩き出していた。現実というものは一つ  
 の夢のように現れて来て人々の眼に映りながら、どうして又消え去つてゆくのだろう。  
 未里は親しい人々の顔をさえ独りで居る時には記憶の中に探さねば、ならなかった。

森茉莉「夢」『父の帽子』より（一九五七）

1 未里<sup>マリイ</sup> …… 作者のこと

2 普烈<sup>プリツ</sup> …… 作者の弟。作者が五歳のとき、病没

3 ラック・レマン …… スイスとフランスにまたがる「レマン湖」をフランス語読みしたもの

4 アマルフィー …… イタリア南部にある港町

2.

## 風景

光が降りそそいでいた  
水があふれやまなかった  
ものみな細やかな影を呼吸していた  
こんなおだやかな　こんなうつくしい  
5 風景が　かつて何処どこかにあったろうか  
幸福感に満たされて　改めて見渡した時  
そこには　ひとりの人影もなかった  
もちろん　私自身の影もなかった  
そこにいない私が　その風景を  
10 ひしひしと感じ取っている  
だから　こんなにもうつくしく  
だから　こんなにもやすらかなのだ  
そこにいない私が　深くうなづいていた  
うなづきながら　涙をながしていた  
15 人間を超えた　生命を超えた世界への  
ゆるぎない信頼と祝福の涙だった  
私は何処にも存在しなかった  
私の不在ゆえに　世界は完璧だった

高橋睦郎『現代詩手帖』より（二〇―二二）

---